キャラクター名
美神 英雄

プレイヤー名

シンドローム	ハヌマーン サラマンダー	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	
オプショナル		年齢	21	性別	男
覚醒	生誕	衝動	闘争	初期侵食率	37 %
出自		経験	別れ	邂逅	剣

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	1	0			4
感覚	1	0	0			1
精神	2	0	0			2
社会	2	0	0			2

HP	30
行動値	10
(非装備時)	10
戦闘移動	15
全力移動	30

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
----Dロイス----------		0	----------	----------		----------
聖剣の王者	白兵	4r+1	7	15		ｼﾅﾘｵ1回ﾏｲﾅｰ使用でC値-2(下限4)　暴走時攻撃不可
----ｴﾌｪｸﾄｺﾝﾎﾞ-------		0	----------	----------		----------
----マイナー---------		0	----------	----------		----------

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	ﾀｲﾐﾝｸﾞ	消費
遺産継承者:聖剣の王者	P　誇り	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　6	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
リミットリリース	1	6	オート	至近	自身	自動	100	
効果：クリティカル値-1(下限5) ｼﾅ/1回								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ:ﾊﾇﾏｰﾝ	3	2	メジャー	-	-	対決	-	
効果：クリティカル値-Lv(下限7)								
獅子奮迅	1	4	メジャー	武器	範囲(選択)	対決	ｼﾅ/Lv回	
効果：射程を範囲(選択)に変更　ｼﾅ/Lv回								
先手必勝	2	基本4	常時	至近	自身	自動	-	
効果：【行動値】+［Lv*3］								
一閃	1	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：全力移動後に攻撃								
炎神の怒り	3	3	ﾒｼﾞｬｰ/ﾘｱｸｼｮﾝ	-	-	-	-	
効果：判定ダイス+［Lv+1］ HP3消費								
煉獄魔神	3	3	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	対決	ﾘﾐｯﾄ	
効果：攻撃力+［Lv*3］ ↑のHPを消費しない								
風鳴りの爪	2	2	メジャー	武器	-	対決	-	
効果：ﾀﾞﾒｰｼﾞﾀﾞｲｽをLv個まで振り直せる								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

PC1行けそうなキャラ
美神 英雄
ﾐｶﾐ　ﾋﾃﾞｵ
ーある日の朝ー
目覚ましの前に起床し、身支度を整える。
人前に出る以上、みっともない格好ではいられない。
よし、これで大丈夫だ。
家を出る前に壁際の小さな写真の前で眼を閉じる。
行ってきます。
　そう呟き、大切な剣を背負い家を出る。
何も変わらないいつもの日常。
そう、この剣を受け継いだあの日から。

その日は朝から浮かない気分だったのを覚えている。どうしても雨というのは苦手だ。否応無く沈んだ気分になってしまう。
そんな日にも変わらない日常はある。
何時ものように施設での訓練を終え、汗を拭っていた私の前に現れたのは、びちゃびちゃに濡れた見知った支部員だった。
突然の事に戸惑う私の前に差し出された一振りの剣。見間違える筈もない。毎朝見ている父の剣だ。
その一瞬で、理解してしまった。ああ、父には2度と会うことは出来ないのだなと。
大規模なFHの襲撃から、彼や瀕死のエージェント、逃げ遅れた一般人を守る為、両親はたった2人で残ったらしい。
彼が助けを呼んで戻った時には、そこに広がっていたのは激しい戦闘の爪痕と、既に死に絶えた母を守るようにして地に剣を突き立て立ち塞がる父の姿だったらしい。
なんて、誇りある死だろうか。